寛政甲寅考試書類三種——その二

戸出[1]　一郎・町[2]　泉寿郎

翻刻

（外題）寛政甲寅考試　問答一件調書　多紀永寿院

寛政甲寅考試姓名

本科

寄合御医師　久保玄長
同　内田玄勝
同　上領玄碩
御番医師　中川隆玄
同　熊谷辨庵
寄合御医師長庵倅　松井素庵
御番御医師孝運倅　村岡玄超
小普請御医師　田中俊川（ⅰオ）」
同　池田玄隆
同　木村簡元
寄合御医師　吉田俊宅
寄合御医師栄元倅　吉田栄全
小普請御医師　岡了節
同　木村元長
同　村上良元
同　町谷玄詮
外科（ⅰウ）」　御番医師　村山元格
同　岡田東淵
小普請御医師　曽谷玄梁
同　増山養甫
小普請御医師　本康寿仙
同　碩庵倅　本康碩寿

小児科

都計貳拾貳名　（ⅱオ）」

品評凡例

一　総て答の趣は墨にて相認メ、品評之趣は委細朱書にて相認置申候。御見出の為に毎条の頭に圏を相加へ申候。白き○、是は上。半白き◑、是は中。黒き●は下にて御座候。至て不宜は●●、ケ様に仕置候。又至て宜ハ○○、ケ様に仕置き申候。

一　大凡為考試出席仕候御医師、尤生得にも関（原本「冂」）リ候而一様ならす候へ共、先ツ気おくれ仕候。平生心得罷在候事共も難申演趣ニ相見候間、其意味を恕察仕品評（ⅲオ）」論定仕候。勿論中には気性丈夫成者に十分を申述、又至て内気成は一向答に及兼候も相見申候。其内、兎角平生之心掛次第に御座候て、臆し候趣成中に常に篤学成者ハ答候様子やすらかにて、始末申候趣にて相分り申候。

一　勿論此度之考試、答方不相応成ル儀有之候。年輩ニも依り可申哉。若年之者之内ニは、此節より勉励仕候ハヽ、随分後ニは良医ニも相成可申者も相見申候。又内気成者ニ而、初而厳重成席上へ罷出、畏縮仕候而答方不宜は、此以後場馴レ候ハヽ、随分心得候程之儀ハ申演、（iiiウ）」存の外常々修行之程相あらわれ候儀も可有御座哉に奉存候。依之考試再三に及不申候而は真面目相分不申者も可有御座哉ニ付、右様之者ハ来春之考試ニ而尚又申上候様可仕候。乍去此度考試席上之趣は何れニも先ツ其の儘ニ而相認メ、且其の儘之趣ニ而論定仕候而相認置候事ニ而御座候。（ivオ）」

（内題）考試問答一件調書

本科　　久保元長

一

（問①）人参敗毒散・参蘇飲・藿香正気散、右三方は感冒に用候薬ニ候処、夫々用方如何差別相心得罷在候哉之事。

（解答）●　三方之方意、得と相心得不申候。但シ一通りの風邪軽き証にハ参蘇飲、重き証にハ敗毒散、食事給兼候ニは人参敗毒散、熱内に伏て不発さるハ藿香正気散と相心得申候。

（朱筆品評）『三方共今日手近き方剤に候処、得と相心得不申候と之答は、定而玄長家にてハ相用不申事故ニも候哉。答之趣相当不仕候。』（1オ）」

（問②）卒倒病人有之候節、真中風ニ候哉、又ハ類中風ニ而候哉、差別見分ケ如何相心得候哉之事。

◑　手足転筋痰涎有之ハ真中風、痰涎無之転筋も無之卒倒致候は類中風と相心得申候。

『痰涎を以て真中類中を辨候儀ハ可有之儀ニ候得共、転筋の有無にて別ち候儀ハ如何に候。何れ此答疑ト不仕候。』（1ウ）」

（問③）中暑と傷暑との辨別如何之事。

●　中暑は暑に中候を申候。傷暑ハ涼之過候而冷気に傷られ候を申候。

『此答相当不仕候。』

（問④）乾霍乱と湿霍乱との差別如何之事。

●　炎熱の節ニ受て吐瀉有之候ハ乾霍乱ニ而候。暑中に湿を含ミ雨湿に中り吐瀉無之ハ湿霍乱ニ而候。二証共ニ暑月斗りニ有之候。

『此答相当不仕候。』

（問⑤）自汗の証に石膏の宜きあり、又ハ黄芪の宜きものあり、附子の宜きあり。辨別如何之事。（2オ）」

●　附子を用候は人に依り候。老人にハ用ひ不申候。至而衰候者ニハ附子を用候て気を引立申候。附子ニ而強過き候ものには黄耆を用申候。石膏は陽盛陰虚に用候。

『此答相当不仕候。老人にても虚寒陽脱之証ニは附子多く相

用候事御座候。老人に附子用不申候と申候は別而心得違に御座候。』

素読　素問　上古天真論之篇首より半百而衰也と申候迄に止。（2ウ）」

『字音句読等誤読無之候』

問　同前　内田玄勝

（問①）○　参蘇飲は欬嗽強く、虚分之感冒、婦人妊娠咳嗽なとに用申候。敗毒散ハ諸班・蝦蟆瘟・熱強感冒に用申候。藿香正気散ハ食傷を兼、霍乱等を兼候に用申候。

『三方用方大抵相聞候。』

（問②）男子なれハ左半身不遂を真中風と相心得、右不遂を類中風と相心得、女子は右とうらはらに御（3オ）」座候と心得罷在候。

中風病因諸説有之処、何の説ニ従候哉。

●　中風病因之儀、当時疑惑仕罷在候。記憶不宜候ニ付、入門・回春の類引合セ証に臨み療治仕候。

『左右にて真中類中を分ケ候説、医書中に見へ不申候。朱丹溪が説に、半身不通、大抵左は死血瘀血に属し、右は痰又ハ気虚に属すと申候を覚違（原本「透」）ひ候に而は無之哉ニ御座候。』

（問③）◑　中暑は炎天に歩行、直ニ暑に中り申候を申候。傷暑ハ大廈広堂に暑を避、冷に傷れ候を申候。中（3ウ）」暑ハ香薷散之類、乾き強きハ白虎湯、傷暑には藿香正気散。

『中暑之答は戴元礼証治要訣に拠リ候と相見、方付共相当ニ御座候。傷暑之答は聢と不仕候。東垣中暑之説と取り違（原本「透」）候趣ニ御座候。』

（問④）乾霍乱ハ暑に中リ湿霍乱ハ食に中リ、何茂吐瀉有之候内、湿霍乱の方先は吐瀉多く御座候。名儀ハ揮霍撩乱之説に従ひ申候。

傷寒論に説候霍乱ハ何之霍乱に候哉。

乾霍乱ニ而御座候。

二証治方如何相心得候哉。（4オ）」

●　湿霍乱食滞吐軽キハ香正気散、吐無して強きものは豆豉をあたゑて吐ニ申候。乾霍乱の吐強きは白虎湯、甚急なる症には附子理中湯を用申候。

『此答并ニ方付共相当不仕候。其内乾霍乱の吐強きは白虎湯、甚急なるハ附子理中湯との儀、白虎湯ハ実熱を治し候寒涼の薬にて御座候。附子理中湯は虚寒を治し候温補之薬にて御座候。此二方氷炭之違（原本「透」）ニ候処、乾霍乱に用可申候との儀ハ甚相聞不申事ニ御座候。（4ウ）」且仲景傷寒論に嘔吐して下利す、名付て霍乱と云と有之候へは、傷寒論に申候ハ湿霍乱にて御座候。此答亦相違仕候。』

（問⑤）○　自汗の症、虚弱労役には黄芪を用ひ或ハ附子を用ひ、表寒裏熱にて舌黒ごけニ仕候ハ石膏を用申候。白苔又は黒苔にてもぬめり有之候ハ附子用申候。然しなから附子一味にて自汗をとめ候儀ハいまた弁し不申候。
『此答大抵相聞候。』　（5オ）」

素読　素問　霊蘭秘典論、気化則能出矣と申所迄ニ止。
『字音句読等誤読無之候。』

問　同前　上領玄碩

（問①）●　三方共ニ発表とのミ心得、差別辨へ不申候。
『此答一概に御座候。方剤組方に心を用ひ不申候と奉存候。』

（問②）●　兼て風を引、周身に痛有之を真中風と仕候。下泄（原本「池」）無之食厥の様ニ卒倒仕候を類中風ト致候。
『此答尤一概にて一向に拠無之説ニ御座候。』　（5ウ）」

（問③）●●　中暑と傷暑と辨へ不申候。

（問④）吐瀉無之ハ乾霍乱、吐瀉有之ハ湿霍乱。
病因ハ何レより発候哉、并ニ夏月斗りニ候哉、并ニ名義如何。
●　暑邪心を冒候ものと存候。四時共に有之候。揮霍撩乱致候故名付候。
『乾湿の辨別相当仕候。病因の答は聢と不仕候。陳無択が三因方に、暑ハ喜て心に帰すと申候説に本づき、必竟霍乱ハ暑に傷れ候より発候とのミ心得居り候故、取違候儀と奉存候。』

（問⑤）●　虚汗ハ附子黄芪を用、自汗盗汗共ニ虚ニ属候ト心得候。（6オ）」実熱ニは石膏を用候。目当之所は悉く辨へ不申候。
『補に清補温補の二途有之、病証にも陰虚陽虚之別有之候。惟虚汗ニのミ申候而は行届不申答ニ候。熱証にも湿熱燥熱の別有之候。一概に熱証にハ石膏と斗り心得居り候も粗略ニ候。病証の見分ハ療治之要務ニ候処、弁へ不申候との答ハ如何ニ御座候。』

素読　素問　六節蔵象論篇首より盈潤矣と申所迄ニ止。
『字音句読は大抵ニ御座候。』　（6ウ）」

問　同前　中川隆玄

（問①）○　四時感冒の内、湿邪を兼候ハ敗毒散、時気感冒湿邪を去申候。参蘇飲ハ感冒咳漱に用申候。藿香正気散ハ内傷外感に用申候。
『三方用法之辨別大抵宜候。』

（問②）類中風・真中風、卒倒之内ハ相分リ不申候。醒て後痰喘積気あるもの類中風、中気不足陽脱回陽せざるものハ真中風にて不治之証に御座候。

治法之儀如何心得候哉。

●　卒倒痰喘壅盛之ものハ三生飲、脈絶ハ参附之類、（7オ）」

臨症用申候。

病因は如何。

真中風は真元虚竭、深く邪を受け臓気を犯し候て発し申候。

邪は何れの邪に候哉。

風邪にて御座候。

『卒倒之初、真と類と見分兼候との答、相聞候様ニハ候得共、醒後痰涎積気有之候者ハ類中風と斗りは難申候。右之証、真中風ニも随分有之候。答之内真中風と申候証ハ脱陽之証ニ而、真中風と斗りハ難申候。病源候論・千金方以降、（7ウ）」諸書ニ有之候中風ハ、口眼喎斜・半身不遂等の風証を見候を申候。其中ニ五蔵江直中の証は不治にも至り候へ共、尽く卒死に至り候証斗り真中風と心得候は誤りニ而御座候。治法之答茂大抵ニ御座候得共、相当とハ申難候。病因之答も餘りあらく、古人の説、区々有之候を弁へ不申哉に御座候。』

（問③）　◑　中暑ハ深堂大廈に暑を避候て冷に傷られ候を申候。清暑之剤、六和湯・藿香正気散之類相用申候。中熱ハ炎天に道途を行キ暑熱に傷られたるを申候。人参白虎湯之類を用申候。傷暑之儀ハ弁へ不申候。　（8オ）」

『此答、東垣之説に拠り大抵宜候。乍去、傷暑と申候儀を弁へ不申候ハ如何ニ候。』

（問④）　●●　湿霍乱・乾霍乱之差別いまた弁へ不申候。

『乾湿の二証を弁不申候ハ如何之儀ニ御座候。病人多く取扱候に似合不申候。且世上多く有之候証に候間、別而心得無之候而は相済不申事ニ御座候。』

（問⑤）　●　石膏自汗に用候儀、手覚無御座候。附子之儀は隣家に悪寒強く自汗有之候病人御座候て、真武湯相用、験を得候類有之候。黄蓍ハ表気うすくしまり不申者に用覚申候。（8ウ）」

『此答茂如何ニ御座候。黄芪之答斗りハ相応ニ候へ共、其外ハ聢と不仕候。隆玄儀療治夥く手掛随分出精は仕候得共、一体之修行は薄く相見申候。』

素読　生気通天論篇首より四維相代陽気乃竭申処迄ニ止。

『字音句読大抵宜候。』

問　同前　熊谷辨庵

（問①）　○　敗毒散は一身の痛を見当に用ひ、邪毒を敗る心（9オ）」にて御座候。藿香正気散ハ内傷に外感を兼候に用申候。参蘇飲は痰気を利候を目当に用申候。

『三方用法之答宜候。』

（問②）　●●　真中類中之儀、劉河間に依候へば真中類中の辨無し。私得と心得不申候。

『劉河間、中風は外来の風にてハ無之、人身本気の病なりと申候説に依り答候趣ニ候得共、左様ニ候ては中風と申候病名を改メ不申候而は相済不申候。此儀、明の張介賓委く景岳全書に其誤りニ候儀を述置申候。此儀ハ姑く差置、何れ真中類中得と心得不申候との（9ウ）」答は如何に御座候。』

（問③）●　強きハ中暑と申候。軽きハ傷暑と申候。何れ茂汗有之候と心得罷在候へども、未琁ト相弁へ不申候。

『此答も琁ト不仕候。主意書御引合御覧被成候様奉存候。』

（問④）○　吐下有之候は湿霍乱と奉存候。十味香薷飲。腹痛強きハ理中湯。吐下無之ハ乾霍乱と奉存候。塩湯にて吐セ申候。兎角霍乱は食気を兼候様ニ存し申候。食滞無之は霍乱ヲ病不申様に相覚罷在候。尤暑月に不限、四時共に有之候様奉存候。

『此答宜候。治法茂大抵相当に御座候。』　（10オ）」

（問⑤）○　脈洪数有力、汗出候者は石膏。脈細無力、汗出候者は附子。虚大にして汗出候者ハ黄蓍。右之趣に相心得罷在候。

『此答宜候。乍然、脈斗りニ而辨別仕、見証ニ而の差別無御座候は如何に御座候。一体答之趣を相考候処、修行之程琁と不仕、才気も十分ニ無之候得共、療治出精は仕候趣ニ相見申候。』

素読　生気通天論　陽気者煩労より粗乃敗之申処迄ニ止。

『字音句読大抵に御座候。』　（10ウ）」

問　同前　松井素庵

（問①）◑　三方倶相心得不申候。但藿香正気散ハ暑気あたり霍乱なとに用申候。参蘇飲ハ飲食凝滞、腹のあんばい不宜に用申候。敗毒散ハ表邪頭痛無汗者に用申候。

『藿香正気散・敗毒散之答ハ大抵宜候。参蘇飲は琁ト不仕候。』

（問②）●●　真中類中ハ未辨不申候。

（問③）◑　直に暑に中リ候を中暑と申候。漸を積候を傷（11オ）」暑と申候。何茂藿香正気散相用申候。

『中暑傷暑之辨ハ三因方・証治要訣之趣ニ而、相当仕候。治法ハ一概ニ候。』

（問④）●●　乾霍乱・湿霍乱いまた弁へ不申候。

（問⑤）●●　三薬の差別相辨不申候。但虚証ハ黄蓍、実証ハ石膏附子と奉存候。

『虚にも表裏陰陽有之、実にも表裏陰陽有之候。惟虚実ト斗りニ而ハ一概に候。其内、実証ハ石膏附子と申候答、別而如何ニ御座候。石膏・附子、氷炭の差別を弁へ不申候と相見申候。』

（11ウ）」

素読　上古天真論首より度百歳而去ト申候所迄ニ止。
『字音句読大抵に御座候。』

問　同前　村岡玄超

（問①）◑　参蘇飲ハ感冒留飲有之候者に用ひ申候。敗毒散は一通り発表の剤と相心得申候。藿香正気散は感冒気滞を兼候証に用申候。
『参蘇飲之答相当仕候。敗毒散は一概に御座候。藿香正気散は気滞兼候との答は聢と不仕候。』（12オ）

（問②）真中風は真元不足ニ依て風邪ニ中リ候と奉存候。発表補陽、続命湯之類を用申候。類中風は痰飲経脈をとぢ身体不遂仕候。二陳湯・清湿化痰湯之類可然奉存候。
右、見証差別如何ニ候哉。
◑　其儀はいまた相弁不申候。
『此答は卒倒之証にてハ無之、半身不遂の証を申候。乍然、辨別之法無之候。方付は先大抵宜候。』

（問③）●　中暑。傷暑、同様ニ相心得申候。
『一概なる答に御座候。』（12ウ）

（問④）●●　乾霍乱・湿霍乱、其儀いまた辨へ不申候。

（問⑤）○　上焦陽気不足・表虚、脈浮緩なるにハ黄芪を用申候。陽脱、脈沈微なるものハ附子相用申候。胃熱薫蒸、脈洪大なるものハ石膏を用申候。
『此答甚宜候。』

素読　素問　宝命全形論篇首より血気争黒と申候処迄ニ止。
『字音句読誤読等無之候。』（13オ）

問　同前　田中俊川

（問⑥）感冒之証に香蘇散・八解散・不換金正気散之三方、用の目当差別如何之事。
○　何も四時感冒に用ひ申候。香蘇散は気分を利し軽き発散之剤と奉存候。八解散ハ体虚之感冒軽き和解と相心得申候。不換金正気散ハ中焦に食滞又ハ暑湿を兼候に用申候。
『三方用法答之趣甚宜候。』

（問⑦）補中益気湯・六君子湯・異功散、皆補脾之剤に候処、用の差別如何之事。（13ウ）
○○　彼是用候証多く候内、中気不足・清陽下陥、升提仕候。清陽下陥の証ハ午後泄瀉、不時に発熱、食餌消化せざる等にて御座候。六君子湯ハ脾胃虚弱・食不進・便泄羸瘦・面色痿黄、痰飲を兼ぬるに用ゆ。異功散は同様に候へ共、湿痰を兼不申候故、半夏無之と弁へ罷在候。
『三方用法答之趣甚宜候。』

（問⑧）　外感之証に可発汗ものと不可発汗ものと其差別有之、如何の事。

◑　外感之証、表に邪あり、壮熱・悪寒・頭痛・項背強・腰脊（14オ）」痛、脈浮緊有力ハ可発汗、麻黄湯の証ニ而御座候。又脈浮緩、汗出候は衛に邪有之候証と奉存候。桂枝湯を用申候。桂枝湯は発汗之剤ニては無之、営衛を調和仕候剤と弁へ罷在候。

『此答大抵宜候。乍然、表実表虚のミにて挾陰両感の証に及不申候。問の主意は裏和表病と裏虚表病にて御座候。』

（問⑨）　尿血・血淋と差別は如何之事。

○　尿血は痛無之、血淋は痛有之候。血淋は実に属シ尿血ハ虚に属候。先ツケ様と奉存候へども一体得と（14ウ）」会得不仕候。

『此辨別宜く候。』

（問⑩）　水腫虚実辨別之法は如何之事。

●　皮肉を按候而直ニ浮は虚腫、皮肉を按候て凹候て暫くくほみて不平は実腫と弁申候。唯此に限リ不申、脈証に依リ可申奉存候得共、慥に辨へ不申候。

『按之候而直に肉起候と、按候而窊候とハ水腫・膚腫之弁にて霊枢水脹篇に出て、陥て不起者は風水と仕候儀、金匱要略に出、又凹候は燥水、凹不申候は湿水と名付候旨、病源候論ニも相見候て、虚腫・実腫ニ拘り候儀（15オ）」ニ而は無御座候。此答は相当不仕候。乍然一体常ニ心掛篤く医学医術共ニ研究仕罷在候儀ト相見申候。年若ニ候間、猶又此上出精仕候ハ、抜群之者ニも相成可申哉ニ奉存候。』

素読　素問　五臓別論篇首より満而不実也申処迄に止。

『字音句読等大抵に御座候。』

問　同前　　池田玄隆　　（15ウ）」

（問⑥）　◑　不換金ハ風邪の軽症に食積を兼候ものに相用ひ申候。八解散はやハらか成薬方にて、病後休薬にても可仕哉ト申節に相用申候。香蘇散は風邪時候に感し咳出るに用ひ申候。

『不換金正気散之答は先大抵ニ相聞候。八解散は病後脾胃調理に用可申との答、是ハ八解散功用之一端ニ而御座候。香蘇散も先大抵に御座候。』

（問⑦）　◑　補中益気湯は中風なと長びく病に用、手足麻痺仕候ものに用ひ申候。六君子湯、すへて内傷脾胃やふれ酒損などに用ひ申候。異効散ハ同様に候へ（16オ）」とも半夏を去候故、痰に拘不申ものに用ひ申候。

『補中益気湯の答、是亦其功用之一端ニ而御座候。六君子湯・異効散之答茂相応に御座候。』

（問⑧）　●　手足微冷するものハかるく発汗すべし。不換金を用申候。参蘇飲ハ強過申候。発散すへからさる症は病人に

対し不申候てハ弁別仕かね申候。
『此答、何と申候儀に候哉、相分不申候。病人に対し不申候てハ辨別成兼候儀も有之候事ニ候へ共、一通演説仕難きと申候程之事ニも無御座候。必竟心得無之故と奉存候。』

（問⑨）　●●　未治療不仕候故、弁へ不申候。　（16ウ）」

（問⑩）　●　按候とくほみ候ハ虚腫、やかてもとの通りに高く成候ハ実腫にて御座候。
『此答茂相当不仕候。』

素読　素問　異法方宜論篇首より毒薬者亦従西方来申処迄ニ止。
『字音句読誤多く御座候。』

木村簡元

口問五ヶ条共答ハ御断申候。私儀博覧は仕候得共、窮（17オ）」究不仕候間御断申候。素読同様。
『右五ヶ条の口問、一ヶ条も答不申候。如何様ニも心得候丈相答候様再三申聞候へ共答不申、読書も同様ニ御座候。医案方付弐ヶ条は休息所におゐて仕候。別冊に認メ有之候。右簡元儀、医案方付之趣を以相考候処、常々医術修行心掛罷在候とハ相見申候。然る処、性得甚内気ニ付、初て厳重成ル席上江罷出、胸中朦朧と仕候様子ニ而答一向出不申候。右ニ付、評論ニ及不申候。此以後場馴候て答も出来可仕哉ニ奉存候。仍而今一応、来春考（17ウ）」試候ハヽ相分可申哉ニ奉存候。』

小児科

吉田俊宅

一　（問①）　小児生下稟受厚薄に依て用薬差別大概如何相心得候哉之事。
◑　稟受厚く胎毒有之候趣に候得は、紅花散・大連尭飲、并に家方茯苓丸相用申候。茯苓丸は丸と申候へとも振出しにて御座候。方は茯苓・枳殼（原本「売」）・紅花・黄連・甘草・欝金之類にて御座候。多味故諳記不仕候。但是迄経験不仕候。虚弱之方は取扱不申（18オ）」候。先、益気湯に人参を加へ用可申哉。甚虚弱に御座候へは独参湯を用申候。又蜜丸と申家方にて多味なる薬御座候。小児初生おしなめまくりに用申候。
『此答大抵聞候へ共、手掛候儀とハ相見不申候。』

（問①）　痘瘡序熱、弁別は如何之事。
◑●　唇乾き耳冷候ものハ痘瘡にて御座候。唇潤ひ耳冷不申候ハ感冒にて御座候。
『耳冷候にて痘瘡と定候儀ハ古説に御座候へ共、必定難仕旨、前輩も申候。唇乾候儀ハ外邪にも有之候。何れ此（18ウ）」答聢と不仕候。』

（問③）　虚痘・実痘之看法大概、如何之事。

◑　虚痘は不乳或は下利黒陥致申候。温中益気湯或は異功散等相用申候。実痘は色紅潤にして便秘仕候。調元解毒湯相用申候。

『虚痘実痘看別之法、一通り相分候。乍然、手掛候而見覚候様ニは相聞不申候。其上、方付之内、調元解毒湯と申候方、見当不申候。調元化毒湯ハ活幼心法に有之候得共、参氏有之、専ら解毒にてハ無御座候。』

（問④）　急驚・慢驚差別如何、并治法如何之事。（19オ）

○　急驚風は実に属し下利無之、慢驚風は腹満下利、発搐仕候。二症共に直視上竄仕候。急驚ハ局方の防風導滞湯。慢驚ハ理中湯。参附之類、実を兼るは抑肝散。急慢共に不乳には牛黄清心円。慢驚は天枢・神闕に灸治仕候。急驚は治し易く、慢驚は治し難く奉存候。

『此答大抵相当仕候。防風導滞湯、局方ニ無之候。何之書出候哉、差当リ見出兼候。』

（問⑤）　泄瀉之症、七味白朮散・胃苓湯・附子理中湯、処治差別如何之事。（19ウ）

●　一体にて実証吐乳有之にハ七味白朮散。時候に感して水瀉あるハ胃苓湯。虚弱にて滑便あるハ理中湯。

『七味白朮散を実証に用候との答は如何ニ御座候。胃苓湯・理中湯の答は大抵相聞申候。』

素読　素問　四気調神論篇首より奉蔵者少申処迄に止。

『字音句読等大抵に御座候。』

問　同前　　吉田栄全

（問①）　◑　私儀未弱年ニ而療治不仕候。当時、書を読罷在候間、書籍之内ニ而心得候ニ而御答仕候。小児初生之儀、手掛不申候へども先虚実に不拘、家方マクリ相用申候。実候者は甘連湯加大黄、虚候者は前方に縮砂辰砂を加へ申候。

『栄全儀、未弱年ニ付、療治之儀ハ未聢と不仕候。多手掛不申儀ニ付、尤ニ御座候。乍併此答、虚薄なる小児にも矢張甘連湯相用候と申候儀ハ、家伝ニ而も可有之哉ニ候得共、一概に御座候。』（20ウ）

（問②）　◑　中指頭并耳冷項辺に班の様成るものを発候者ハ痘序と奉存候。此証無之者は感冒と相心得申候。

『是亦古人の説に従ひ候而之答にて相応ニ御座候。』

（問③）　○○　活幼心法を見候へバ痘多乾白、下利有之候は虚痘と奉存候。稠密・壮熱・煩悶・大便結し、乾紅に候は実痘と奉存候。

『活幼心法之大概を諳記仕罷在候儀と相聞、年若成者ニ而不意ニ相尋候答には随分宜御座候。』

（問④）　○○　急驚ハ実症に属し、卒に壮熱・牙関緊急・角弓反張仕候。荆防敗毒散に天麻・地骨皮を加へ用候。慢驚ハ

虚（21オ）」に属し、大病後吐瀉後に発申候。七味白朮散に天麻・姜蚕・釣藤鉤を加江、或は理中湯用申候。
『此答随分宜御座候。其内荆防敗毒、天麻・地骨皮之加味は和剤局方に出候て、人参羌活散と名付、急驚の主方ニ而御座候。』

（問⑤）　○○　胃中津液乾き虚熱渇（原本「湯」）して瀉するは七味白朮散、胃中湿熱煩渇して瀉するは胃苓湯、胃中虚弱・四肢微冷泄瀉するにハ理中湯、厥冷するものハ加附子相用候。
『此答も甚宜御座候。此者常々心掛宜、不断研究仕候ト（21ウ）」相見、答の趣やすらかニ相聞候。引続出精仕候ハヽ抜群之御医師ニ相成可申奉存候。』

素読　素問　生気通天論篇首より汨々乎不可止申処迄ニ止。
『字音句読等少も滞り無之候。』

一　岡了節

（問①）　小児生下稟受之厚薄によつて用薬差別如何之事。
○　色淡白口中冷候は虚弱と奉存候。色至而赤、啼（22オ）」哭之声高く響候者、実と奉存候。至而虚弱ならハ独参湯、左程にこれなきは補中益気湯、実ならは甘連湯加大黄用申候。大便不利胎毒あるニも前方用申候。胎毒の目利は、大便少く口中の穢物臭く、吐し候事少く腹部に脹り有之候にて弁別仕候。
『此答穏当ニ而宜御座候。』

（問⑥）　膀風・撮口一病なる哉、又別病なる哉、如何之事。
◑　臍風は断臍の節、水湿臍より入リ発申候。撮口は胎熱と奉存候。二症之弁別得と相弁へ不申候。（22ウ）」
『此答も先相応ニ御座候。乍然、古人之説共彼是研究仕候ての答とハ相聞不申候。』

（問⑦）　小児の癇と驚風と一病なる哉、又別病なる哉、如何之事。
○　癇と驚風と一病ニも可有之哉。古にいふ陽癇と申候は急驚、陰癇ト申候は慢驚と相心得申候。急驚ハ駆風之剤、敗毒散之類、慢驚ハ醒脾散之類ニ而御座候。
驚風の風字如何。
此儀相辨不申候。（23オ）」
『此答穏当ニ御座候。薬方も大抵宜候。風の字義、諸説有之入組候事ニ付、弁不申候と申候も尤ニハ候得共、博考仕候趣には相聞不申候。』

（問②）　痘疹序熱弁別の事如何之事。
○　痘瘡序熱ハ往来なく驚惕等有之候。耳後冷候は痘瘡と承リ候得共、夫ニも限リ不申候よふに奉存候。虫積の熱ハ腹部

はり虫症を見し候よふに覚申候。外邪の熱ハ頭痛・悪寒・噴嚏等出申候。
『此答も穏当ニ御座候。』

（問⑧）　痘瘡寒戦咬牙を発するハ虚寒に属する哉、毒盛に属（23ウ）」する哉、如何之事。
○　多くハ虚寒に属し申候。毒盛に因リ候者候得共、多くは色淡白下利等有之、虚寒に属し申候。
『此答も大抵相聞候。了節儀、一体療治多手掛ケ罷在候而出精仕候程ニは相見、答之趣安らかに相聞候。乍然、才気格別と申候程ニは無御座候。』

素読　素問　移精変気論篇首より故祝由不能已也と申処迄ニ止。
『字音句読滞無之候。』　（24オ）」

一　木村元長

（問①）　小児生下稟受厚薄に依て用薬差別之大概如何之事。
○○　生て淡白なるハ虚弱に候間、胎毒の有無に依て人参を用申候。胎毒の有無は心下を按候ハ鞕く嘔気有之、口中に吐の気を催は胎毒有之候ニ付紫円を用申候。若按之候て心下不鞕、且色淡白にて手足冷ゆるハ人参を入候而理中湯を用申候。生れ中分にて二便通宜きハ甘連湯、大便秘（24ウ）」候ハ大黄を加へ申候。又家方に五香湯と申候方有之候。黄連・紅花・甘草・大黄・鷓鴣菜、此方も中通之小児に便秘し申候ニ用申候。啼声を発し不申候に二通リ有之候。胎毒の咽に聚り申候ハ紫円を用申候。其証は腹部硬し、必す口中に粘沫あつまり有之候。虚弱にて啼声を発し不申候ハ腹部軟弱にて御座候。天枢江灸治仕、人参之類用申候。大抵頭髪濃きハ実にて稀なるハ虚と相定申候。
『此答甚宜御座候。』

（問⑨）　小児の弟み病と疳病と見分如何之事。　（25オ）」
◑　先おとみ病は寒熱時ニ有之、髪の毛薄く形体羸瘦、腹部拘攣仕候。必竟、乳母体中に伏熱有之、気血錯乱仕候乳を給候故に此症を発申候。疳との差別ハ双方共に疳瀉の気味有之、分ち難く候。乳母に承ク継病に候ハ、殊に依リ大黄を用候事も有之候。病名は魃病と覚申候。
『此答聢と不仕候。母体中の伏熱により病候と申候ハ古人の説にも有之候へ共、一端にて御座候。委細は主意書にて御覧被成候様奉存候。魃と覚候ハ、世間通用仕候和本明版千金方に、誤り候而、魃を魃に作り置（25ウ）」候故の儀に御座候。乍然、薛鎧保嬰撮要にハ魃病、一名魃病と有之候。是以博く研究不仕故の弊にて御座候。』

（問⑩）　小児五軟は如何之事。
○　一体胎中より受ケ気血の不足に因て起リ申候。手軟・脚軟ハ八味丸、頭項軟・身軟にハ大補湯、口軟ハ六君子湯に医

通の菖蒲丸兼用仕候。乍然、是迄手掛不申候。
『此答大抵宜御座候。』

（問⑪）　小児変蒸虫積発熱と外感発熱と辨別如何之事。
（26オ）」

○　変蒸は唇に白き珠の如きもの出候と承申候得共、外邪にも有之候様ニ被存候。大体に三十二日に一変抔申候て日数極候て出候は見当リ不申候。虫積の熱ハ口に白沫を含ミ、好ミ不申物を好ミ、腹痛時に起時止候等之証にて見分申候。外邪は外邪之証を見し申候。
『此答も穏当に御座候。』

（問⑫）　実痘虚痘、初中末手充差別大概如何之事。

○　序熱の内ハ小児によりて分リ候と分リ不申と有之、疑似之間は真的無御座候。升麻葛根湯相用申候（26ウ）。見点以後、顆粒小に色淡く候ハ保元湯の類用申候。紫黒色なるハ解毒仕候。活幼心法の牛旁子湯、并ニ神功散を用申候。裏実便秘にハ紫円抔相用申候。貫膿に至り膿漿も盈不申、色淡白ニ候ハ鹿茸湯。一体紫黒ニ候処、貫膿ニ至り順症に相成候ハ千金内托散用申候。此節、毒気盛にて泄瀉仕候ハ毒気下流仕候証に候間、矢張解毒の剤相用申候。便秘候ハ貫膿之節ニ而も大黄相用申候。気虚毒盛にて泄瀉仕候は人参等相用申候へ共、毒気内攻仕主剤致方無御座候。
『此答随分宜御座候。元長儀、年若にハ御座候得共（27オ）」

療治多手掛ケ出精仕候程有之、答之趣何れも宜御座候。才気茂有之候者ニ付、才を恃ミ自許自負仕候心を屈シ、不恥下問、此上志篤く研究仕候ハヽ逐々抜群之御医師ニ罷成可申奉存候。』

素読　素問　湯液醪醴論篇首より亦何暇不早乎申処迄ニ止。
『読方大抵ニ相聞申候。』

問　同前　村上良元
（27ウ）」

（問①）　◑　幼少より病身ニ而記憶不宜候ニ付、家伝之書にて取廻し候故、委敷事は申上かたく御座候。虚弱なるものハ甘連湯・家方連尭湯を用申候。連尭湯ハ矢張、紅花散之類ニ而御座候。眼中うるむものハ虚、すゝしきものハ実にて御座候。
『家方と申事ニ異議は無之候得共、虚実を不分、甘連湯・紅花散之類相用候儀は如何ニ御座候。眼中にて虚実看別仕候儀ハ一端ニ而御座候。』

（問⑨）　●●　をとみ病は手かけ不申候。疳ハしかと覚不申候。
『啞科之答には如何に御座候。』
（28オ）」

（問⑩）　●●　五軟は記憶よろしからす候ゆへ分リ不申候。書籍を見不申候ては御答出来不申候。

『専門の者にて左斗りの儀を書籍に預置候と申候茂如何敷御座候。』

（問⑪）　●●　同断

『啞科にて辨不申候は如何ニ御座候。』

（問⑫）　●●　痘瘡も視不申候へは演説仕兼候。

『良元儀ハ村上家と唱へ、世上にて疱瘡専門之家と心得罷在候。然る処、痘瘡見不申候而は演説成兼候との答は如何之事ニ候哉。胸中に心得居不申候而は眼（28ウ）」に見候而も口頭ニ演兼可申候。胸中ニ心得居候得は大凡之儀は撮候て申述候儀可相成筈之処、右様之答は必竟短才の上、心掛薄き故と奉存候。中年にも相成可申哉ノ所、旁以何如敷事ニ御座候。』

素読　素問　霊蘭秘典論篇首より決瀆之官と申所迄ニ止。

『読かた誤読多く有之候。』

問　同前　　町谷元銓　　（29オ）」

（問⑧）　○　紅なるハ実症ニ而御座候。甘連湯内へ大黄・海人草を加、又は紅花散　大黄・紅花・檳榔・胡黄連七八味之家法相用申候。清白なるは虚証なる故、補剤を用申候。五味異功散。啼哭なきハ脾胃虚弱なる故、七味白朮散を用申候。一体に虚と奉存候。実症有之候哉、覚不申候。

『答之趣大抵相聞候。年若ニは相応に御座候。』

（問⑨）　○　継病は肌膚羸瘦仕候。乳不足ニ而邪気ハ無之候。疳ハ色々有之候得共、腹脹満面青く、兎角ニ抱候得は寐、下に置候得ば寐不申候。わけも無之事に啼哭致（29ウ）」し候。頰中ニ青筋出申候。

『此答一通り相聞候。』

（問⑩）　●●　五軟ハ不覚候。

（問⑪）　●　変蒸之熱ハ額にのみ有汗、或は吐下有之候。虫積之熱は往来有之候。外感之熱ハ似たる様なれとも差別可有之候。未熟故未弁候。

『此答拠茂無之一体聢と不仕、年若ニ付病人多取扱不申故と相見申候。』

（問⑫）　○　虚痘之色淡白、起脹中比迄地脹なく多くハ悪寒之気味有之、先ハ下利有之候。しかし下利ハ虚（30オ）」症にも限リ不申候。実痘ハ序熱強、引付吐下あり、痘之根まわり赤く食を能給申候。毒痘之見点二日メ位にても皮外ニ不発、色皆赤く紫を帯、或ハ手之中なとに二ツ三ツ有もあり、虚痘起脹より水漿迄ハ先補ひ申候。八物湯ニ三黄散を合申候。三黄散は黄連・黄芩・黄栢を用申候。下利有レハ肉豆蔻を加へ申候。下利劇ハ白朮散、猪苓・沢瀉を加へ申候。灌膿以後、別て虚候ハ鹿茸湯ヲ用申候。実症順痘なれは牛旁子湯の類相用申候。毒強けれハ初発思やふに発兼候。見点起膿之中比迄

解毒仕候。毒強きハ家方米膏申候三味之合薬を解毒の剤ニ加へ用申候。灌膿以後ハ実痘ニ而も虚候故、（30ウ）」八物湯に牛旁子等加へ申候。終には餘毒を解候ため大連翹飲の類を用申候。

『始末一通り相心得候趣ニ御座候。此法は父元悦仕覚ト相見申候。元銓儀、答之趣を以て相考候処、学術出精仕候と申程ニは相見不申候。乍去、一体器様者にて候間、以来勉励仕候ハ、才気伸立上達可仕者ニ而御座候。』

素読　素問　六節蔵象論篇首より天度畢矣申処迄ニ止。（31オ）」

『読方疎漏に御座候。』

外科

村山元格

一　（問①）　癰疽辨別如何相心得候哉之事。

◑　癰は浅く疽は深く御座候。癰は粟粒のごとく二三点発し堅く、潰て後一ツニなり大ナル口と相成申候。疽は別種にて癰の深きものを申候哉ニ候へとも聢と相弁不申候。

大小にて相分候説は如何候哉。

此儀相心得不申候。（31ウ）」

牛領の如しといふものハ何にて候哉。

牛領と申は癬之類に牛皮癬と申もの御座候。其儀にても可有御座哉。癰疽のうへニてハ存知不申候。私儀、家督之砌、幼少ニ而家業之儀相談可仕者無之、酒井修理太夫家来杉田玄伯と申ものに従ひ蛮流外科相学ひ唐土の書籍取用不申候。但病人に対し治療を施し候事のみ相心得罷在候ニ付、御尋之儀一々御答不仕候。

『癰の答は相応ニ候。疽之儀、専門にて手近き儀心得不申候は如何ニ御座候。兼而療治自負ニは似合不申（32オ）」事に候。蛮流故、唐土に候儀ハ不存ト申候事、可有之候へ共、蛮人にも此病無之儀ハ無御座候。且一体村山之家は偏に蛮流のミ相用候とも難申候。此者養父元格癰之療治仕候をも見受候処、多艾灸相用申候。蛮流にハ灸仕候儀ハ無御座候。然は家の流儀は唐流と相見申候。村山之家も久き御外科ニ候間、家之書茂可有之候処、一向に沙汰不仕、家江対し一体主意如何ニ御座候。諸家の長を取用ひ候而家伎の助に仕、一流を大成仕候社、可為本意事に御座候。然る処右の趣故、癰の大小并ニ牛領之如くと申候儀も蛮説に無之事故、心（32ウ）」得不申と相答候儀と相見候へ共、其説之起候処は何れの国ニ而も其病証有之候得は（原本「共」）、看別之法ハ是非同様ニ無之候而は相成不申候。若蛮説ニ無之候ハ、唐之説ニ而も和の説にても取用、治療之手充缺ケ不申候様ニ仕候社、家業に篤志と可申事に候所、左無之候は必竟家業を苟且ニ仕、心掛薄キ故と奉存候。』

（問②）　癰疽五発の事如何。

●●　相辨不申候。尤取用不申候。

蛮説ニも癰疽五発に符合いたし候事有之候。此儀は如何心得候哉。（33オ）」

一向相弁へ不申候。

『蛮説にも符合仕候儀有之候処、弁不申候との答は、蛮書も研究不仕趣に相見申候。』

（問③）膿之有無浅深、看法如何之事。

●　色赤く根にもわだかまりあり頭突起いたし候ハ膿有之候。色薄く根にわたかまり無ものハ膿無御座候。浅深之儀は五分高く腫上り候得は三分下タに膿有之候。一寸高く腫上り候得は七分下タに膿有之候。

平身にて膿あるハ如何。（33ウ）」

熱の強弱と、一寸四方程の内、錐を刺ス如ク疼ハ膿あり、一円に疼は膿なし。

平身にて膿あるもの浅深を察する法如何。

真的無之候。

『此答穏当に無御座候。別而腫之高低にて浅深を計リ候と申候儀ハ杜撰ニ而御座候。又平身にて膿有之候もの之答、甚不穏儀ニ御座候。』

（問④）附骨疽・多骨疽の弁別如何。

●　附骨疽・多骨疽ハ同様と相心得申候。洗薬・傅薬にても散り不申候。是又按ハ内へ籾をつめ候様ニてざく〳〵（34オ）」仕候。大法骨に徹して疼申候。骨に附て疼さるも御座候。発する所の差別は無之哉。

差別無御座候内、多くは股膝に附申候。一婦人肘に発し候を見申候。治療は差別無御座候。

『附骨疽・多骨疽を一病に仕候も相当不仕候。何れも吟味仕置候儀とハ相見不申候。』

（問⑤）金瘡腸出不収者、治療手充如何。

●　他流のことく焼酒にて洗不申候。先温湯一升焼酒一合、粉薬を入れ人肌のあたゝまりに仕、洗申候て（34ウ）」小口より入れ、大疵ハ其まゝ入れ申候。突疵にて疵口セまく、腸出ふくれ魚胞のことくからび候て不収ハ、前の洗薬にて洗とくと蒸収申候。夫ニても収リ不申は杉山流の微針を用ひ打候へはしなび申候を収入申候。

腸に疵の付候看法如何。

腸出候ても大抵ハ死に不申候。腸の疵の看法ハ湯に洗候へは湯、桃色になり申候。疵これなけ（原本「き」）れは色つき不申、且能洗候へば能見へ申候。

腸の疵口より気息泄候看法如何。（35オ）」

是迄右之証心得不申候。

『蛮流にてもぬるま湯に洗候儀ハ無之候。且杉山流の様なる微針も阿蘭陀には無之候。此答茂甚胡乱に御座候。疵口より気息洩候哉否之看法ハ、金瘡治療之上に於て心得無之候而は相済不申事ニ御座候処、弁不申候との答は療治自負に似合不申候。』

素読　私儀幼年より学文未熟のうへ一昨々年大病煩候以後、別而記憶不宜、読書等不仕候。依之素読の（35ウ）」儀御断申上候。

如ケ様ニも読可被申候。

強て読候へは十字の内七字は読め不申候。

『読書可仕旨申聞候処、右之通り緊く相断申候。強て為読候而は甚迷惑成ル様子ニ付、任其意候儀ニ而御座候。必竟蛮流主張仕候事故、唐土之書読候に不及と申候主意之様に相見候へ共、薬品蛮名等申口を承り候処、是以疑と心得罷在候様ニも相聞不申候。若強て為読候ハヽ、先達被仰渡候ニも、恥辱ニ中リ候様成儀は仕間敷との儀も御座候御事ニ付、蛮書も（36オ）」用意仕置候へ共、是又為読不申候。総而何事も先入主となり申候事ニ付、先入之儀大切に御座候。元格に限り不申一同に、一生を誤り候儀御座候。元格儀、幼年家督に候処、家業之世話仕遣し候者無御座候故、酒井修理大夫家来杉田玄伯と申候者ニ相談仕候へ共、此玄伯蛮流と申候事にて一分ハ如何仕候哉、文字辺之儀は一向構不申、惟療治之仕方を口授のミ仕、病人を眼にて見候斗リにて仕込候故、家業向之儀、是にニ而事済候事と相心得、唐土之書に載候医術は迂遠の事のミにて用（36ウ）」立不申、其上外科ハ術に候間、文字は入不申候抔見識相立候儀と奉存候。右之主意故、治療多く仕候而も見聞を博メ候文字を読不申候間、新智ヲ益候事一向に出来不仕、右答之ことく行届不申事共多く有之候。此者に限り不申、幼年家督にて家業向世話仕候者無之候は、皆落着不仕者ニ相成候類、是迄見聞仕候。以来ケ様之類、取斗ヒ方も可有御座哉に奉存候。』

問　同前　岡田東淵　（37オ）」

（問①）○　癰疽の儀、彼是説有之候得共、癰ハ浅く疽は深く候。疽は瘡口窄く底深く候まゝ、又三寸より五寸を癰ト申、五寸より一尺を疽と申、一尺より三尺に至り候を竟体疽ト申候旨、外科精義ニ見へ申候。総て陽証陰証にて分け候事ト相心得罷在候。

『此答相当仕候。大抵研究仕候趣ニ而宜相聞候。』

（問②）●●　五発癰疽は考置候得共、諳記不仕候。

『考は有之候得共、諳記不仕候との儀、諸説有之候故、熟考仕置候儀と奉存候。然ハ大意ハ承知仕罷在候儀と相聞候。』　（37ウ）」

（問④）●　附骨疽は流注楊梅瘡、打撲より此症ニ相成腐乱仕、一体陰症と存候。発候処定り無御座候。多骨疽は手掛ケ不申候。

腿の骨ニ附痛膿を持候ハ何レの症に候哉。

○　流注風毒之類と奉存候。右之症は一度に膿を取候は不宜、程能取膿を止置、折を見て宜節、又膿を取申候。

『附骨疽・多骨疽之名、俗習に因循仕、取違候儀と奉存候。』

（問③）◑　膿の有無は口にてハ申かたく候。手かけ候て覚申候。（38オ）」乍然膿あるものハ按て手にこたへ不申、痛申候。膿なきハ手にこたへ申候。

『此答大抵聞候へとも聢とハ不仕候。』

（問⑤）◑　腸出胞脹いたし候者は鶏子焼酎にて強くわかし、気をしつめて術にて収候へは不収ハ無之候。これにても収リ不申候はまわり斗縫候而其まゝ捲置申候へは自然に其まゝ収リ申候。夫にても収リ不申は切捨申候。但し切捨ニ而不苦ルハ膜にても可有御座哉と奉存候。腸へ疵付、息の漏候ハ不治の症と奉存候。未夕手がけ不申候。　（38ウ）」

『此答も大抵宜御座候。乍然、収り不申者ハまわり斗り縫ひ其儘巻置候と申候儀は如何ニ候。且夫にても収り不申ハ腸出候を截捨て候と申候儀ハ決て有之間敷事ニ御座候。尤膜にても可有御座哉と申候ハ尤ニ御座候。膜と申候は主意書中に認置候膏の事と相聞候。』

素読　外科精要　騎竹馬灸法之一段読申候。

『字音句読誤読無之候。』　（39オ）」

一　曽谷玄梁

（問⑥）癰疽虚実之辨別如何之事。

○○　虚実は即陰陽にて御座候。純陽之症は正中高、色赤ク膿水一杯ニ満、大便調、声音長く食進ミ、膿に臭気なきを実と仕候。順陰之症は、痛なく色黒く腫低く膿薄して臭く、大便泄シ或ハ秘し申候。即虚ニて御座候。

『此答甚宜御座候。』

（問③）膿之有無浅深、看法如何之事。

○　按て痛なきハ膿なし。痛にハ膿有。按て凹は深く（39ウ）」膿有、軽く按てハ痛なし。少し按て痛候ハ膿浅く候。

『此答大抵宜御座候。』

（問⑦）疔瘡と類疔と差別如何之事。

○　千金方に有之候通、始メ釘の頭の如く粟粒の如く、寒熱不食、便秘し申候。類疔と申候事、存不申候。且手掛ケ不申候。

『此答宜候。類疔と申候儀、唐土之書に無之候故、存不申も尤に御座候。未年若にて書籍のミ研究仕、病人多手掛ケ不申候故、疔に類し候もの見当不（40オ）」申様に相見申候。』

（問⑧）魚口便毒差別如何之事。

○　正宗ニ而左右に分ち候ハ不宜と奉存候。瘡口魚口之如く大なる故、便毒之潰破仕候を魚口と申候。異名至て多ものに御座候。

『此答も相当仕候。』

（問⑨）金瘡出血手充之事。

●　家伝に紫金と申候粉薬ふり掛候而止メ申候。金瘡は多く

手掛不申候。

『金瘡は蛮流精密にて一体宜御座候。玄梁儀は（40ウ）」薛己流と申候而唐土之流義ニ而御座候。殊に金瘡は御医師へハ手掛させ候儀少く、其上未年若ニ付、取扱候儀稀ニ而可有御座候間、是ハ尤なる事ニ御座候。併一体答之趣相考候処、平日学術共心掛篤く出精仕罷在候と相見、後々御用立可申者と奉存候。』

素読　素問　五蔵生成篇首より五色之見生也申処迄ニ止。（41オ）」

『字音句読等誤読無之候』

問　同前　増山養甫

（問⑥）◑　赤く瘀鏻は陽症、すへて上に発するを実とす。下陥するを陰と仕候。膿水稀く臭気なきハ実、膿水稠く青白にて臭気あり腫平等なるハ陰症にて虚と仕候。

『此答大抵相当仕候。乍去膿水之稀稠ハ取違申候。』

（問③）●　按て凹ものハ膿水有之候。平等にて按て硬きハ膿有リ。すへて痛強きハ膿あり。平身にて膿有は膏薬にかぶれ、又ハ痒み有之候は膿有之候。一体に食事よろしく外ニしつらひなきは（41ウ）」浅し。反之候ハ深く御座候。

『此答は齟齬仕候。又膏薬かぶれ痒み有之候と申候儀は、膿の有無に拘り候儀にてハ無御座候。』

（問⑦）◑　疔は痛はけしく寒熱譫語有之候。反之候ものハ類疔にて御座候。但し類疔は何と申事弁へ不申候。紅絲疔と申候もの類疔ニ有之候哉ニ奉存候。

『疔之答は大抵宜候。類疔と申候儀、弁不申候ハ聞候得共、紅絲疔を類疔と仕候は如何に御座候。紅絲疔は疔腫より紅の絲を引候て、内攻仕候へバ死に至リ、矢張疔中の一証にて御座候。』（42オ）」

（問⑧）○　魚口・便毒、別証と申説有之候へ共、拙案には一証と奉存候。

『此答相当仕候。』

（問⑨）●　如何様に血止め用ひ候得共止み不申もの有之候。此間も見受候へ共、此迄致し覚申候止方無御座候。

『取飾不申、正直なる答に御座候。乍然一通り血止メ用候ても止り不申ト斗りニ而は餘り心掛ケ薄く相聞申候。乍然其外一体治療之方ハ相心得居り候趣に相見申候。』（42ウ）」

素読　外科精要　騎馬竹馬灸法

『字音句読滞無之候。』

口科

一　本康寿僊

（問①）喉痺・乳蛾、差別如何之事。

●●　未熟にて弁不申候。
『世に多く有之候証にて弁不申候とハ専門にハ如何に御座候。』　（43オ）」
（問②）　重舌・痰包、差別如何之事。
●　重舌は舌の下にまろく出来、色赤く痛有之候。手かけ候得共、治不申候。痰包の儀は弁へ不申候。
『重舌の形状ハ答相応に御座候。併一概に治不申と申儀ハ有御座間敷儀ニ御座候。』
（問③）　走馬牙疳、治法如何之事。
●●　手かけ不申、一体弁へ不申候。
（問④）　歯斷宣（原本「宜」）露、手充如何之事。
○　家方の傳薬、乳香・丁子・半夏・紫檀右四味細末（43ウ）」にして付申候。含薬、荆芥・白芷・山梔子・甘草・細辛にて御座候。
（問⑤）　世に云舌疽治療如何之事。
●　手かけ候へとも不治故、断申候。
『不治之証と申候も尤ニ御座候。右寿仙儀ハ未年若にて候間、未療治多取扱不申、且一体甚小気者に相見申候て一向に畏縮仕、心得罷在候儀も演説仕兼候様子に相見申候。仍而此度之考試にハ聢と相分兼申候。』　（44オ）」

素読　素問　上古天真論百歳乃去ト申処迄ニ止。
『読方大抵滞無御座候。』
問　同前　本康碩寿（原本「寿碩」）
（問①）　◑　私幼年より病身未熟に罷在、同苗手を離候てハ一向に療治出来不申候。喉痺は脾の蔵の病にて喉一はいに腫申候。証により針を用申候。手前流儀にてハ多くハ針を用不申候。吹薬・含薬を相用申候。含薬は桔梗・升麻・黄連・紅花・当帰右五味煎し用申候。吹薬ハ巴豆一味、又ハ膽礬・雄黄・明（44ウ）」礬三味を末となし吹込申候。乳蛾は弁へ不申候。
『答の趣一通リハ相聞申候へども、自己一家の方のミ心得罷在候儀と相見申候。』
（問②）　◑　重舌手掛不申候。乍然、薬方は桔梗・黄芩・当帰・芍薬・甘草・赤小豆の末を入煎申候。又外に赤小豆の末を醋にとき候て塗リ申候。痰包も未手がけ不申候。
『前条同様に御座候。赤小豆酢に和し塗候儀は本草綱目、赤小豆附方に出申候間、家方とも難申候。』
（問③）　◑　走馬牙疳手がけ不申候。病の形如何と申候事も弁へ不申候。薬方は巴豆・黄芩・胆礬・雄黄・桔梗五味、末と（45オ）」なし附ケ申候。
『方付相応に可有之候へ共、此外にも仕法可有御座事に御座

候。』

（問④）◑　宣露之薬方は升麻・桔梗・生地黄・肉桂・茯苓・青皮・勺薬、右含ミ申候。

『是亦前条同様に御座候。』

（問⑤）●　世に申舌疽之儀、一向手掛ケ不申候。家伝之書に不治之病と有之候。

『右碩寿（原本「寿碩」）儀も一体実貞に相見、小気者ニ而候故、畏縮仕候而心得罷在儀も演説難成趣に相見申候。（45ウ）」薬方諳記仕居候を見候ヘバ、家伎のミ心得罷在候様子ニ御座候。博ク学候ハヽ、逐々上達も可仕候哉ニ御座候。』

素読　素問　上古天真論篇首より半百而衰也申処迄ニ止。

『読方滞リ多く御座候。』（46オ）」

寅

九月

多紀永寿院

多紀安長

山本宗英

吉田快庵

桂川甫周

山崎宗運（46ウ）」

追記、前号二九二ページ上段五行目（1才）は（1オ）の誤りです。

※本稿は文部科学省科学研究費助成・特定領域研究A(2)「江戸のモノづくり」研究の一環である。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）[1]

（二松学舎大学・北里研究所医史学研究部）[2]